

「自邸建築の記」

(2012)

実家は宇部の隣町で車で30分の通勤可能な場所にあったし、又希望すれば会社の社宅も十分に準備はされていたが、自宅の設計の夢に耐え切れず、32才の時、自宅建築に踏み切った。設計のデッサンは既に入社した時から様々なアイデアを蓄えていたし、仕事も程ほどに、夜も寝られずスケッチを描き続けた。しがないサラリーマンで通常なら木造住宅だろうが、僕は残念ながら、木造の詳細を不勉強だったし（今もって分からない）、それに見積書にある「大工手間」なる魔物が大嫌いだった。それに何よりも無柱の大空間（居間）が欲しかった・・・ということ。鉄骨造に踏み込む事になった。・・・そういえば「鋼構造」こそ、僕が大学時代唯一欠点を貰った学科だった。

当時の情勢とすれば、36坪で、公庫借り入れ+会社の財形融資+わずかの自己資金で何とか建てられた。世は正に高度成長期、住宅金融公庫の金利は5.5%だったが、それ以上に年々驚くほどのインフレの世の中で、デフレの最中の今の若い人が聞いたらびっくりするような有様だった。実際に後々の給与と賞与による返済も殆んど痛みを感じない程のベースアップ振りだった。

床面積120㎡以下が公庫の条件というから、最初のイメージは鉄骨造で縦・横・高さ11mのキューブを造り、全面ガラス張り、内部の部屋・間仕切りは木造で自由に造り替え・・・何ヶ月も全く本気で詳細

図まで作り検討したが・・・???断念した。

次に考えたのはやはり11m四角の2階平面を4m四角の構造コアで支える案で、構造的にも美しいが、何よりも無柱の大空間（居間）が欲しかった。次に考えたのは、3.1×3.1m×12個（1・2階共6個）というユニット構造である、これをベースに、最終案は柱スパン3.1mとし、2階の居間は真ん中の柱を抜いて6.2×6.2mの大空間とした。柱H100、2階梁H200、3階梁H150の単純な造りで構造計算も何とか自分でやってみた。

全面ガラスは無理としても、何よりも大きな開口（窓）が欲しかった、この大きな開口窓をスチールで作るか、アルミで特注するか、木製隠し框窓を建具屋に作ってもらうか・・・と悩んでいたところ、旭硝子が「ビューライト」なる住宅サッシを売り出しているのを見つけた。

W×H共2.4mの引き違い吊方式で、ガラスは5mmのテンパーライトだから中棧も無く、框の見付けは20mmしかない美しいサッシだった、2階居間の南西隅部に2台をL型に設置した。道路側の東南隅部はW2.4×H1.4mの中連嵌め殺し窓を出窓としてL型に設置した。当初のイメージである全面ガラス張りとは程遠いが、眩しいほどに明るい居間が出来た。入社して未だ10年の若造だったが、感性と体力は今思い出すにつけ最も光っていた時期ではないかと思う。

76年5月、自宅が完成した。金融公庫の制限一杯の120㎡だった

が四方八方に増築用の梁継ぎ手が突き出した1、2階共60㎡の塔の様な家だった。以後2、3年で、中3階洋間、1階洋間（2階ベランダ）、ガレージ、玄関ポーチ等を増築し延べ200㎡もの大きな家となった。自慢の40㎡の居間に、会社の仲間、友人等を招いての大宴会、そして当時小学生だった二人の子供がクラス中の友達を招いての大パーティーもしばしばであった・・事もあり、口伝えに評判を呼び、以後数年の間に12軒もの住宅の設計依頼を受けた、僕と同年代の若い会社の仲間や友達だった事もあり、安い設計料で懇切丁寧に最後まで引き受けた。お金のことより設計が本当に楽しかった。

僕の売りは ①見積価格が明瞭で安価 ②大空間が可能な鉄骨造 ③屋根裏（中3階）の利用 ④半地下室空間 ④眺めのよい2階にLDK ⑤緩やかな階段（D285／H162、柔らかい絨毯巻き） ⑥トイレには必ず小便器付き ⑦屋根に出られ・明るさ抜群・風通し確保の天窗 ⑧芝生の庭

会社の仕事も段々忙しくなる頃だったが、会社でも自宅でもプランニングを徹底的に詰めた。後は、工務店や鉄骨・内装・木工・設備・業者さんの協力を得ながら多くの施工図面を御願いした。その代わり僕の自宅から最後の13軒目の家まで全く同じ工務店・下請け業者・現場担当者という僕を知り尽くしたメンバーで建て続けた。見方を変えれば「会社の私物化・業者との癒着・談合」とも言われかねないが、結果的にはび

つくりするほどの品質と安い値段で、皆さんに喜んでもらえた。又この時期、僕の設計した住宅に瓜二つの木造住宅があるという噂を耳にし、そっと見に行った事がある。真似をされるようになれば建築家も本望だ？ この勢いのある時、退社して設計事務所を立ち上げていれば・・・と思わない事も無いが、実際自立するのは大変な事だったろうと想像する。理想を追求する事より算盤勘定を大事にする僕の結論だった。



竣工当時（76年5月）



現状

屋根にも窓が欲しかった。3階に寝て、寝たまま星が見えないかと考えた。法規制に依る6・8m網入りガラスは、どうも美しくないし重すぎる。それよりも既成の開閉式アクリドーム天窓（1・2×1・2m）を2台設置した。夜空は見えないが屋根への出入り・明るさの確保・空気の入れ替えにとても便利だ。

今になってみて、もう一度この場所に建てるとするならば・・・と時々

想像してみると真に面白い。

ミースの「ファーストスワース邸」、ジョンソンの「グラスハウス」のイメージが学生時代の僕の脳裏に余りにも強烈に焼きついており、

自宅建築の面白さは「自分のものを自分で設計する」という単純な事だが、一番の本質は何と言ってもその金を出すのも自分の財布から・・という事に尽きる。もちろん会社の建物でも、お客さんから依頼された建物でも経済設計というのは最重要課題ではあるが、コストプランニングというのが自宅設計のキーではないかと思う。

あれからもう35年、我が家も夫婦二人きりになった。冬は暖かい3階で寝、夏は1階の和室で寝、子供達が育った1階の洋間を今、僕の仕事部屋に使っている。もうすぐ70代に突入しようとする我ら健康夫婦もあと何年でこの2階のLDKを放棄しなければならないのだろうか？

会社員時代の自分の建築生活を振り返れば、社有の寮・保養所・研修所・社宅・マンション・ビル、事務所・病院・研究所・ゴルフ場・・・等を始め、テレビ山口、宇部興産ビル（宇部全日空ホテル）、天王洲再開発（本社ビル）、大型ショッピングセンター、ゴルフリゾート計画・・・若い頃には海外勤務（トルコ）の経験もさせてもらった。今から思うに歴史のある古い企業で、地元宇部はおろか関東近辺にも信じられないほどの土地の蓄積があつての事、そして何よりも我々の時代が高度成長の勢いが未だ残っている時代の中で「借金・投資」という図式に建築屋が

活躍出来たと言う事なのだろう。

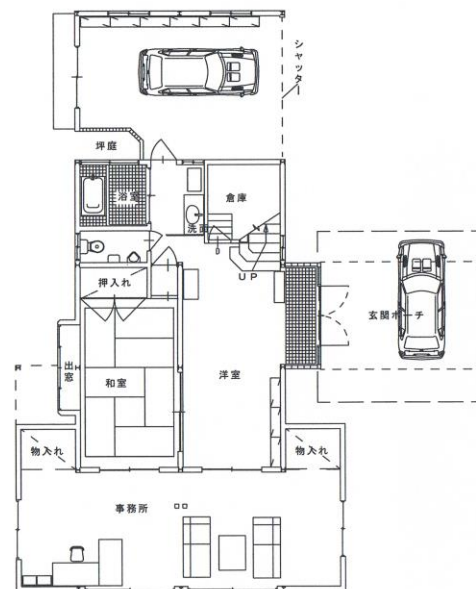
幸いにも退職・還暦祝いに妻・子供達から貰った「アーロンチェア」の快適さと、何よりも窓を空ければすぐ庭に出て樹々や花々に触れられるという逃げ場があるのがいい。夕方は5時迄机に向かってるのは余りにも哀れなので4時に机を離れるようにしている。

リタイヤ後の生活は自由で気儘だが、食事時と昼食後の30分の昼寝と、夜の団欒時以外は居間を離れ自分の「仕事部屋」に籠るようにしている、哀しいサラリーマン生活40年の風習だ。

我が家の庭の桜が満開の時、高齢の両親をよく我が家に招くのだが、二人を2階の居間に上げるのにひと苦勞した、父を抱きかかえ、母は両手について這うようにしてやっと2階に辿り着く。居間が2階にある我が家の階段は普通の住宅でも珍しいほど緩やかな階段（踏面285 蹴上162）のはずだがそれでもこの有様である。そりやそうだろう、今や「バリアフリー」の世の中だ。

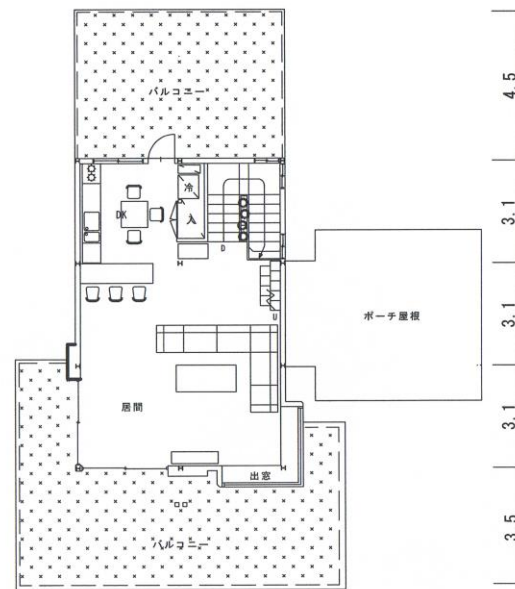
庭仕事」

朝未だき小庭に春の匂い立つ
庭の窓開けて今朝より春の人
清明の風浴びており朝の庭



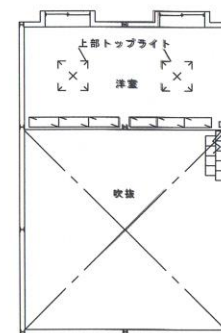
1.8 3.1 3.1 1.8

1階



3.1 3.1

2階



3.1 3.1

3階

杉の香を五体に浴びて枝落とす

鉤^{なた}振れば杉の青葉に息咽る

枝落とす腰手拭の優男^{やさおとこ}

物言わぬひと日とならむ枝落とす

高空に独り言して枝落し

土塊^{つちくれ}に白き貝殻春立ちぬ

凍て土を握れば貝殻春の色

凍て土を握りて地温に触れてみる



春陰や土竜^{もぐら}の土の柔らかさ

蚊遣火を抱えて妻の庭仕事

春耕を終え土くれを持ち帰る

鋤^{くわ}仕事 腕^{こわ}強張りぬ薄暑かな

爪割れて馴れぬ鋤持つ春盛り

夏近し 鎌あおおと研ぎにけり

草刈れば野苅いはらは今咲き誇る

草刈の爆音終えて白雨来る

草を刈る手首は細し指細し

万緑の小さき庭のわが宇宙

風見鶏カラカラ鳴りて花散らす

へり浮かぶ 秋天高き蒼あおの中

蒼天に決意の刃やいば飛行雲

花苗を植え終え六十路冬晴れる

庭仕舞い夕餉の遅き日永かな

古庭に筍たけのこ迫り来たりけり

春耕の土を二階に持ち帰る

薄氷うすらいの崩れる刹那ありにけり

薄氷の割れて赤子の泣く如し